

J. S. ミル『功利主義論集』 Utilitarianism 川名雄一郎／山本圭一郎訳、京都大学学術出版会[2010]

「ベンサム」[1838]

■ 卓越主義の擁護

・「彼[ベンサム]は、人間を精神的完成を目的として追求することのできる存在として、すなわち自らの内的意識以外の源泉から生じてくる善への希望や悪への恐怖を抱くことなく、自らもっている卓越性の基準に自らの性格を合致させること自体を望むことができる存在として認識することは決してなかった。」(127)「彼が見落としているのは、厳密な意味での人間本性の道徳的部分——完全性への欲求や是認したり非難したりするという感情——だけではない。彼は他のあらゆる理想的目的をそれ自体として追求することを人間本性に関する事実としてほとんど認識していない。[1]廉恥心や個人の尊厳——すなわち他者の意見とは無関係に、あるいはそれに反抗して作用する個人の高揚や墮落の感情、[2]芸術家の情熱である美への愛、[3]あらゆる事物における秩序、適合、調和やそれらが目的にかなっていることへの愛、[4]運動や活動に対する渴望であって、それと反対のものである安楽への愛にほとんど劣らない影響を人間の生に及ぼす信条である行為への愛。これらの人間本性の有力な構成要素のうちどれも「行為の動機」の中に位置を占める価値があると考えられていない…」(128)

■ 道徳の別の側面

・「道徳は二つの部分から構成されている。そのひとつは自己教育であり、すなわち人間が自分で自分の感情や意志を鍛錬することである。この領域はベンサムの体系においては空白である。もうひとつの同等な部分は、人間の外面的な行為の規制に関するものであるが、第一のものがなければ、まったく不十分で不完全なものであるに違いない。…ベンサムの原理に立脚している道徳論者も、殺すなかれ、放火するなかれ、盗むなかれという程度のことには到達できるだろう。しかし、人間の行為のより微妙な違いを規定したり、この世界の状況に影響を及ぼすこととまったく別に、性格の深みに影響するような人間の生についての事実——たとえば、男女間の関係、家族一般の関係、その他の何らかの親密な社会的・共感的関係など——に対して、より重要な道徳性を認める能力があるだろうか。」(132)

■ 二次目的の媒介

・「功利性、あるいは幸福はあまりにも複雑で漠然としすぎており、さまざまな二次目的を媒介にすることなしには追求することができない目的であると私たちは考えている。そして、これらの二次目的に関しては、究極的基準については意見を異にしている人々の間でも合意することがありうるし、しばしば合意している。」(152)「功利性を基準として採用している人々は、二次原理を媒介としないかぎり、それを正しく適用することはめったにできないし、それを拒否している人々は、一般的には二次原理を第一原理へ昇格させているだけである。」(153)

■ ベンサムが無視した道徳以外の側面

・「人間のあらゆる行為は三つの側面をもっている。道徳的側面、すなわち行為の正・不正に関わる側面と、審美的側面、すなわち行為の美しさに関わる側面と、共感的側面、すなわち行為の愛らしさに関わる側面である。第一のものは私たちの理性や良心に関わり、第二のものは私たちの想像力に関わり、第三のものは私たちの同胞感情に関わる。私たちは第一のものに照らして是認したり否認したりし、第二のものに照らして賞賛したり侮蔑したりし、第三のものに照らして愛したり憐れんだり嫌悪したりする」(155)。「感情論は三つのうち後の二つを最初のものよりも上位に置くものであり、一般の道徳論者やベンサムの誤りは、後の二つを完全に無視することにある。」(156)

功利主義[1861]

■ 効用の質的区別（快樂主義を批判する人たちへの応答）

・「快樂の質的違いということによって何を意味しているのか…。二つの快樂のうち、両方を経験した人のすべてあるいはほとんどすべてが道徳的義務の感情とは関係なしにはっきりと選びとるものがあるとすれば、それが望ましい快樂である。二つの快樂をともによく知っている人が、そのうち一方がより多くの不満を伴うことを知った上で、そちらをはるかに高く評価し選びとって、もう一方の快樂を考えられうるかぎり多く与えられたとしてもそれを放棄しようとしないとすれば、選びとられた方の快樂を享受することが量的に補って余りあるほど質的に優越しているために比較の際に量をほとんど考慮しなくてよいと考えて問題ない。

ところで[高次の快樂と低次の快樂の]どちらも同じくらい知っていて、どちらも同じように評価し享受することができる人々が、自らの高等な能力を使用するようなあり方をはっきりと選び取るということは疑いようのない事実である。」(267)「愚か者やのろま、悪漢のほうが自らの運命に満足していると説き伏せられたとしても、知性ある人間が愚か者になることを、教育ある人が無学者になることを、感情や良心を持つ人が利己的で卑しい人になることを了解したりはしないだろう。」(268)

■ 満足した豚よりも、不満を抱えたソクラテスになれ

・「快樂を享受する能力の低い人はそれを十分に満足させる見込みが大いにあるが、高い能力に恵まれた人は、自分の求めることのできる幸福は今あるがままの世界においては不十分なものであるといつも感じていることは疑う余地のないことであろう。しかし、このような人はこの不完全さがなんとか耐えうるものならばそれに耐えることができるようになる。…満足した豚よりも不満を抱えた人間の方がよく、満足した愚か者よりも不満を抱えたソクラテスの方がよい。愚か者や豚がこれと異なった考え方をもっているとしたら、それは愚か者や豚がこの論点に関して自分たちの側のことしか知らないからである。」

・「高次の快樂を享受することのできる人の多くが折に触れて誘惑にかられ、それを低次の快樂の後回しにしているという反論がなされるかもしれない。しかし、このことは高次の

快樂の方が本質的に優れていることを全面的に認めることとまったく矛盾していない。しばしば人間は性格の弱さゆえに価値が低いと分かっているながら手近にある善を選びとる。…若い頃にあらゆる高貴なものに対して熱意をもっていた人の多くが年齢を重ねるにつれて怠惰で利己的な状態に陥っているという反論がなされるかもしれない。しかし、このようなごくありふれた変化を経験する人が高次の快樂よりも低次のものを自発的に選びとっているとは私には思えない。…高貴な感情を働かせる力は多くの点で弱々しい植物のようなものであり、不利な作用によってだけでなく、養分が不足しただけでも簡単に枯れてしまう。大部分の青年にとって、人生のその時々についてきた職業やそれによって関わることになる社会がこの高等な能力を発揮し続けるのに不向きならばこの力は弱ってしまう。人々は知的な趣味を失うことによって高い意欲も失ってしまう。」(270)

■ 不満を抱えた高貴な人間が、人々を幸せにする

・「その[功利主義の]基準は行為者の最大幸福ではなく、総計としての幸福の最大量」である。「そして、高貴な人物がその高貴さによってつねに幸福であるかは疑問の余地があるかもしれないが、その高貴さが人々をより幸福にし、それによって世界は全体としてはかりしれない利益を得ているのである。したがって、たとえ各人が他人の高貴さによってのみ利益を得ていて、幸福に関するかぎり彼自身の高貴さはそのような利益からさしひいておくとしても、功利主義の目的は性格の高貴さを全面的に陶冶していくことによってのみ達成することができる。」(271)

→これに対して反対論者は、人間は幸福がなくてもやっつけていけるし、高貴な人間は幸福を感じていない。自制を学んで高貴な人間になることこそ、人間の目的になるべきだ、と主張する。Cf.カーライル

・「反対論者は、幸福を人生の目的と考えるように教えられたとしても、人間がそのような控えめな幸福を分かちあうことに満足するか疑問に思うかもしれない。しかし、人類の大多数はより控えめなものに満足してきた。満ち足りた人生を構成するのは主に二つのことであり、いずれもそれだけで満ち足りた人生という目的にとっては十分である。つまり、平穏と興奮である。平穏に恵まれていれば大半の人はごくわずかの快樂で満足できる。多くの興奮があれば、大半の人はかなりの量の苦痛を耐えることができる。人類の大部分にとってこの二つを結びつけることは本質的に不可能であるということはある。」(274)

■ 「他者への愛情」と「涵養された精神」

・「それなりに幸運な境遇に恵まれている人が人生を価値あるものにするほど十分な快樂を見出していないとすれば、それは一般に彼らが自分のことしか気にしていないからである。」(274)「死後に個人的愛情を注ぐ対象となるものを残すような人、とりわけ人類全体に対する関心もちながら同胞の感情も陶冶してきた人は、死の間際でも、若さと健康にあふれて活力があったときと同じように、人生に対して生き生きとした関心を抱き続けている。利己心に次いで、人生を満足のいかないものにする重要な要因は、精神的涵養が不足していることである。涵養された精神は、…自然の事物、芸術作品、詩的創作、歴史上の事件、人類の過去から現在に至るまでの足跡や未来の展望など、周囲のあらゆるものに尽きることのない興味の源泉を見出す。」(274-275)

→ミルの功利主義においては、人生の「快樂」を最大化することよりも、「人生を価値あるもの」にすることや、「人生を満足いくものにする」ことが目標となっている。そのために、利己心を克服して他者へ愛情を向けることや、精神的教養を身につけることが必要だと主張している。

■ 自己犠牲の美德

・「たしかに、幸福なしにやっけていくことは可能である。二十人のうち十九人が意識せずにそうしている…。…英雄や殉教者は自らの幸福よりも大切にすることのためにしばしば自発的にそうしている。しかし、この大切なものが他者の幸福や幸福の何らかの要件でないとしたら、それは何なのだろうか。自分の幸福やそれを得る機会をまったく放棄することができるというのは気高いことであるが、この自己犠牲は結局のところ何らかの目的のためのものであるに違いない。」(277)「人生における個人的な楽しみを放棄することによって世界の幸福の総量を増大させることができるときに、楽しみを自ら放棄することのできる人々は本当に賞賛されるべきである。」(278)

・「…世界が不完全な状態にあるかぎり、そのような[自己]犠牲をすすんで払う気持ちをもっていることは人間にとって最高の徳であるということをして私は認めている。私はさらに、このような状態の世界では、逆説的な主張かもしれないが、意識的に幸福なしにやっけていくことができるということが、到達可能な幸福を実現することについての最良の見通しを与えてくれると認めている。」(278)「功利主義者は献身という道徳が自分たちのものでもあるということをして、ストア派や先験論者と同じくらい正当な権利をもって主張し続けなければならない。」(287-279)「ナザレのイエスの黄金律に、私たちは功利性の倫理の完全な精神を読み取る。人にしてもらいたいと思うことを人にしなさいというのと、自分自身を愛するように隣人を愛しなさいというのは、功利主義道徳の理想的極地である。」(279)

■ 功利主義の二つの理念

(1) 法や社会制度を、すべての個人の幸福・利害ができるだけ社会全体の利害と一致するように改革せよ。

(2) 教育と世論を通じて、自らの幸福と全体の善のあいだに切っても切れない結びつきがあることを、人々に認識させよ(279)。このようにすれば、「全体の善を増進するという直接的な衝動があらゆる個人にとって行為の習慣的な動機の一つとなり、それに伴う感情が各人の中で大きな位置を占めるようになるだろう。」(280)

・「しかし、(千人のうちに一人くらいを別にすれば)誰かが広範にわたって幸福を増大させる能力をもっている、言い換えれば、公共の役に立つ人であるという場合は滅多にない。このような場合にだけ公共の功利を考慮することが求められ、他のあらゆる場合には個人の功利、つまりごく少数の人の利益や幸福だけに關心を向けていけばよい。自らの行為が社会一般に影響するような人だけがこういう広い対象に習慣的に關心を向ける必要がある。」(281)

■ 功利主義は冷酷か？

・「功利主義は人間を冷酷で非情にするとか、他者に対する道徳感情をくじくとか、行為を生じさせた資質を道徳的に評価することなく行為の帰結だけを無味乾燥に評価させるとい

うことがしばしば主張される。この主張が、行為の正・不正についての判断が行為の資質についての見解によって左右されてはならないということを意味しているならば、これは功利主義に対するものではなく、なんらかの道徳の基準をもつこと自体に対する申し立てである。」(282)

■ 功利主義は宗教を肯定する

・「神は何よりも被造物の幸福を望んでおり、それが神の創造の目的であると考えることが真の信仰だとすれば、功利性は無神論でないばかりでなく、他のどのような理論よりも大いに宗教的である。」(285)

■ 功利主義は便宜主義ではない（ルール功利主義の擁護）

・「…信頼は現在の社会の福利にとっての主要な支えであるだけでなく、それが十分でないと文明や徳、人間の幸福が大きく依存しているあらゆるものを他の何にもまして阻害しかねないようなものである。目先の利益のために並外れた便宜性をもつ法に背くことは便宜にかなっていないと思われるし、自分自身や他の誰かの都合のために身勝手なことをして、お互いの言葉に多かれ少なかれ信用を置くことができることによる善を人類から奪い、人類に害悪を負わせるような人は、人類の最悪の敵の一人という役割を演じていると思われる。」(286)

■ 功利計算の不可能性？

・「功利性を擁護する人は、一連の行為が全体の幸福に与える影響すべてを行為に先立って計算し比較検討している時間はないというような反対論に応えることがしばしば必要になる。これは、何らかの行為をしなければならぬ機会のたびに旧約聖書や新約聖書を読み通している時間はないから、キリスト教を指針として行為することが不可能であると言っているのとまったく同じことである。」(287)

→ミルはここから、人類の英知（過去の深慮）の利用と、実践における可謬主義（人間の精神が進歩するかぎり道徳の規則は永遠に改善されていく）に訴えている。

■ 同胞と一体化したいという欲求

・道徳的強制力には、「外的強制力」と「内的強制力」がある。

・「外的強制力」とは、「私たちが同胞に対してもっているであろう共感や愛情や、利己的な結果に関係なく神が望んでいることをおこなう気持ちにさせる神への愛と畏敬の念であり、さらに同胞や万物の支配者からよく思われたいという希望や彼らの不興を買うことを恐れる気持ちである。」(292)

・「内的強制力」とは、「人類の良心」である。「道徳的義務の拘束力は、正義の基準を犯すためには打ち破らなければならず、それでいてその基準を実際に犯せば、後に自責の念という形で現れてくるに違いないような一群の感情[すなわち良心]が存在していることに起因する。」(294)

・この「良心」に基づく「義務の感情」と、「功利性の原理」は、結びついて調和する。人はそのような結びつきを快適と感じ、そのような結びつきを他者の中に生じさせたり、自分自身の中でも大切に育てたいという自然な感情を抱くようになる。そのような自然な感

情の基礎は存在する。「ひとたび全体の幸福が倫理の基礎として認識されれば、これは功利主義道徳論の強みとなる。この確固とした基礎とは人類の社会的感情という基礎のことである。つまり、同胞と一体化したいという欲求であり、それはすでに人間本性における強い原理となっているし、幸いなことに、それははっきりと教え込まれなくても文明の進歩の作用によって強くなっていく傾向をもっているものの一つである。…人間が野蛮な独立状態からさらに脱していくにつれて、この結びつきはますます強いものとなる。」(298)

・「あらゆる点で社会的紐帯が強くなり、あらゆる点で社会が健全に発展していくことで、各個人は他者の福利に実際に配慮することにますます強い個人的利益を見出すようになるだけでなく、自らの感情を他者の善にますます向けるようになるか、少なくとも他者の善をそれまで以上に実際に考慮するようになる。まるで本能的であるかのように、人は自分が他者に配慮することが当然だと考えるようになる。」(299)

・「そして、人はこのような感情をまったく抱いていないとしても、他者がこのような感情を抱いているということから他の人と同じように大きな利益を受ける。」(299-300)

■ 「感情を共有できない他者」の善を促進せよ

・「人は意見の違いや精神的教養の違いのせいで同胞が実際にもっている感情の多くを共有できない——同胞の感情を非難したり拒否したりすることがあるかもしれない——としても、自分の本当の目的と同胞のそれは衝突しないこと、自分は同胞が本当に望んでいるもの、つまり彼ら自身の善に反対しているのではなく、むしろそれを促進しているということを意識しなければならない。多くの人にとってこの感情は強度の点で利己的感情よりも劣っており、まったく欠如していることもしばしばある。しかし、この感情をもっている人にとっては、それは自然な感情もっている特徴のすべてを備えている。この感情は、そのような人々の精神にとっては、教育が教え込んだ迷信や社会的権力が専制的に押し付けた法としてではなく、彼らにとってなくてはならないような属性とみなされる。この確信が最大幸福論の究極的強制力である。」(301-302)

■ 幸福よりも善を求める人を包摂する

・功利主義は、幸福よりも善（徳）を求めるべきだという主張を認める。「功利主義道徳論者は、究極目的のための手段として善であるものの筆頭に徳を位置づけるだけでなく、徳以外の目的に注意を向けることがなくても個人にとって徳がそれ自体として善になりうることを心理的事実として認めるだろう。」(304)「幸福を構成する要素はきわめて多様であり、それぞれの要素は[幸福の]総量を増すと考えられるときにのみ望ましいのではなく、それ自体として望ましいものである。功利主義の原理は、たとえば音楽のような何らかの快楽や、たとえば健康のように苦痛を回避することが、幸福と名づけられた何らかの集合的なものための手段と見なされるべきだとか、そのような理由によって望まれるべきだとは言っていない。それらはそれ自体として、それ自身のために望まれており、望ましいのである。」(305)

■ 正義を道徳的に包摂する基準としての功利主義

・正・不正を判断する基準は、幸福や功利性の原理から導くことはできない、という反論について。

・「正義の感情の二つの本質的な要素は、危害を加えた人を罰したいという欲求と、危害を加えられた一人あるいは複数の特定の人が存在しているという認識や確信である。」(325)

・「この[正義の]感情は、それ自体としては道徳的なものを一切含んではいない。道徳的なのは、この感情が社会的共感の求めるところに付随し従うようになるくらい完全にその下位に置かれることである。というのは、私たちは誰かに不愉快なことをされると、それがどのようなことであっても、自然な感情によって見境なく憤慨するだろうが、社会的感情によって道徳化されている場合には、自然な感情は全体の善と一致するような方向にしか作用しないからである。」(327)

・「カントは…道徳の根本原理として『その行為の規則がすべての理性的存在によって法として採用されるように行為せよ』というものを提案したとき、行為の道徳性を入念に確定するためには、人類の利益が集散的に、あるいは少なくとも人々の利益が差別されることなく、行為者の念頭に置かれていなければならないということを事実上認めていた。…カントの原理に何らかの意味をもたせるには、次のような意味が与えられなければならない。すなわち、私たちはすべての理性的存在が採用するであろう規則とそれらの存在の集散的利益への便益を勘案して自らの行為を決定しなければならない。」(328)

・「功利性は不確実な基準であって、すべての人が異なった仕方ですそれを解釈しているし、それ自体が根拠をもっていて世論の揺らぎとは無関係な正義による不変で不滅で明白な指令以外に確実なものはないとたえず告げられる。」(331)しかし「何が正しいのかについては、何が社会にとって有用なのかについてと同じように、多くの見解の相違や多くの議論がある。」(332)

・「私は功利性に基礎づけられていない空想的な正義の基準を打ち立てているあらゆる理論の主張に対して異議を唱えるが、功利性に基礎づけられた正義があらゆる道徳の主要部分であり、飛びぬけて神聖で拘束力の強い部分であるとみなしている。正義とはある種の道徳的規則に対する名称であり、それは人生の指針となる他のあらゆる規則よりも人間の福利にとって不可欠なものにより緊密に関わるものであり、それゆえに絶対的な拘束力をもっている。」(338)